

研究主題

「学びを拓く」生徒の育成

— 基礎・基本の定着を図る教科指導のあり方 —

1. はじめに

「ゆとり」の中で「生きる力」を育む教育課程は、新たに設定された「総合的な学習の時間」への様々な意見や、現行学習指導要領下における学力低下問題への危惧など、早くからその取組の充実・改善が迫られ、文部科学省は学習指導要領の一部改正（2003年12月）を行った。すなわち、文部科学省は、新たに学習指導要領の「基準性」に関する記述や、「はじめ規定」等の記述を見直し、子どもたちに学習指導要領に示されている基礎的・基本的な内容の定着を確実にするよう指導の充実を謳ったのである。しかし、昨年12月、日本の児童・生徒の学力順位が前回より下がったという国際学力調査（TIMSS, PISA）結果の公表が現行学習指導要領と学力低下問題に対する世論にさらに拍車をかけた向きがある。

私たちは、文部科学省が、ゆとりの中で、「自ら学び、自ら考える力」などの「生きる力」の育成を目指した教育を掲げたときから、「生きる力を育む」を主題として研究を進めてきた。必修教科、選択教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間等の実践を通して、「学び」を知識や技能の習得だけでなく、興味・関心や意欲、感性、思考や判断の深まりといった資質や能力を含めた個の成長と捉えてきた。その中で、「学びを拓く力」を「意欲が高まり、主体的に学習をすすめ、自分の可能性を開拓していく力の育ち」と捉え、本校の全教育活動を通じて取り組み、教育実践を進めてきた。そして、そうした力をつけるには、それを支える力として、①主体的に問題を解決する力 ②自己を表現し、コミュニケーションする力 ③自己の「学び」を自ら振り返る自己評価の力の3つの力を高めていくことが大事であると考えた。

私たちは、研究と実践において、研究の対象を学校生活の大部分を占める必修教科に置き、その学習活動を中心とした「学び」によって、生徒が「学びを拓く力」を獲得できるよう努めてきた。そして、実践では、3つの力の育成に視点を当てた多様で幅広い学習の活動をめざした。

2. 研究主題と関わって

(1) 「学びを拓く」と「基礎・基本」

私たちは、先に述べたように、「学び」を知識や技能の詰め込みではなく、興味・関心や意欲、感性、思考や判断の深まりといった資質や能力を含めた個の成長であり、「学びを拓く力」を「意欲が高まり、主体的に学習をすすめ、自分の可能性を開拓していく力の育ち」であると捉えている。そして、私たちは、「学びを拓く」力は、生徒が将来、社会の一員として生きていくための基礎になるものと考えている。

これまでの取組の中で、私たちは、生徒につけたい力として、①主体的に問題を解決する力 ②自己を表現し、コミュニケーションする力 ③自己の「学び」を自ら振り返る自己評価の力の3つの力をとり上げ、学習活動を通してこれらの力を定着させることができれば、「学び」は拓かれると捉えてきた。そして、この3つの力を支えるものが教科学習の基礎・基本であると理解している。つまり、教科学習の基礎・基本を見極め、具体的に捉えて、それらの習得をめざした学習活動を構想し進めていけば、生徒につけたい3つの力を身につけさせることができ、ひいては「学びを拓く力」として定着させることができると考える。

(2) 「基礎・基本」をどのようにとらえるか

「基礎・基本」が身につけているとは、あることについて「わかる、できる、しようとする」、あるいは「できるような状態にある」ということであると考えている。学校教育においては「どのようなこと」を「わ

かる、できる、しようとする」べきなのかを定めているのは学習指導要領である。学習指導要領に示される「目標・内容」を基礎・基本と考えるのはそこに依るものである。私たちが主たる研究のフィールドにしている必修教科においても、まず教科の「目標」が示されており、それらはさらにそれぞれの分野別あるいは時間配列（成長の過程）等でより細かい「内容」が定められている。私たちは、その基礎・基本を身につけることによってどのような人間になるべきかを「育てたい生徒」として示しているのである。

研究を進める上で、「基礎・基本」をどのような視点から捉えるかを取組の出発点とした。私たちが取り上げたのは次の3つである。

①相対的に基礎・基本をとらえる

基礎や基本という言葉には、「基になる大切なもの」「何かを支えるもの」というイメージがある。そこで、「何に対する（何を支える）基礎・基本なのか」を考えることとした。例えば、学校教育の目的から考えれば人間形成のための基礎・基本を身につけさせることであり、各教科から考えれば教科教育の目標に対する基礎・基本となる。また、単元あるいは1時間の授業に対する基礎・基本もあれば、単元や授業を支える基礎・基本、さらにはその授業で身につけさせたい基礎・基本も考えられる。つまり、私たちは基礎・基本を「何に対する（何を支える）基礎・基本なのか」という相対的な考え方で捉えようと考えている。

②多面的に基礎・基本をとらえる

「知識や技能」「関心・意欲・態度」「思考力や判断力」「創造力・表現力」など、さまざまな面から基礎・基本を考えるとということである。

これまでも、それぞれの教科の学習を通じて、どのような「知識・技能」を身につけるべきかについては常々論じられ、学習指導要領にも具体的な項目が示されている。それに比して「関心・意欲・態度」「思考力・判断力」「創造力・表現力」については、研究が進む中、その内容が明らかにされてきているとはいえ、まだ十分とは言いがたい。よって、私たちはこれまでの取組を通して基礎・基本を、「知識・技能」といった身につけさせたい内容と「関心・意欲・態度」や「思考力・判断力・創造力」などの資質・能力という2つの側面から捉えることにした。

同じ「学習を通して身につけるもの」とはいえ、両者は大きな違いがある。前者は学習者に対して外部から与えられるものであり、極端な言い方をすれば、教えられた通りに覚え、できるようになることが学習の目標となるといってもよいだろう。よって、学習の出発点も目標もはっきりしやすい。「知らない、できない」ところから「知っている、できる」ところに至ればよいのである。評価についても、数値的な表示も含めてははっきりしたものとなる。これに対して、後者は本質的に個々の学習者の内部にあるものと言える。外部からの刺激に触発され、また、「知識」に支えられるという側面を持つが、その外部からの知識や技能のように教えられた通りのそのままの形というものは存在しない。よって、学習の出発点も目標も明示することが難しい。その評価についても同様のことが言えよう。

このように、同じ「身につける」という表現を用いても、前者と後者についてはそのとらえ方は異なるものでなくてはならない。しかし、その両者が身につけてこそ学習が成立したと言える。それぞれをどのように分析し、また、評価していくかを考えていかななくてはならない。このことが生徒の「学び」や「学びの拓き」に繋がっていくものと考えたい。

③弾力的に基礎・基本をとらえる

学習内容の定着の度合いについて、個々の生徒に視点をあてていくということである。同じ目標に向かって学習が展開されても、生徒一人ひとりを見れば、学び方も違えば定着のスピードも違う。そのことは、思考・判断や関心・意欲・態度が重視されたこと、個に応じた弾力的な学習指導の展開の工夫が強調されていることから明らかである。個に応じて基礎・基本の定着を図ることが、自分らしい「学び」の拓きに繋がるものと私たちは考えている。

3. 一年次、二年次の研究に関して

私たちは、生徒が意欲を持って、主体的に学習を進め、自分らしい「学び」を展開していく中で、基礎・基本が定着してゆけば、「学びを拓く力」は培われ、生きる力へと繋がっていくものであると考え、一昨年、昨年と研究を進めてきた。そして、その研究の視点を次の2点に絞った。

- | |
|-----------------------------------|
| ○ 教科の基礎・基本を明らかにしていく。 . . . (1) |
| ○ 基礎・基本の定着を図る指導法の研究をする。 . . . (2) |

「教科の基礎・基本を明らかにしていく」ことは、生徒にどのような学習内容をどのような学習活動で展開させ、教師はそれをどう指導・支援していくかということを確認にすることである。本研究を進めるにあたり、私たちは、本校の教育目標、生徒につけたい力や育てたい生徒像について再確認した。授業実践に向け、各教科の基礎・基本を明確にし、指導の目標や内容、指導の過程など教科でつけたい力とその評価規準を明記した。その上で、教科でつけたい力が3つの力「①主体的に問題を解決する力 ②自己を表現し、コミュニケーションする力 ③自己の『学び』を自ら振り返る自己評価の力」の育成にどう関わっているのかを、各教科ごとに分析し考察を進めた。

「基礎・基本の定着を図る指導法の研究をする」については、各教科の教科目標に基づき学習指導計画を立て直した。学習の基礎・基本を見極め、各単元の観点ごとに評価規準を設定した。そして、それらを基に評価基準表や単元構成表を作成し、具体的な学習の過程を検討し授業に臨んだ。授業の実践後は、その指導のねらいと生徒の学習成果との見直しや課題解決について、問題点を検討した。

3つの力については、例えば、国語科や英語科では、②「自己を表現し、コミュニケーションする力」の習得を前面に出した取組を行ってきた。また、社会科や理科では、①「主体的に問題を解決する力」の育成を目指し問題解決型の授業を展開し、実践研究を進めてきた。このように、3つの力の①と②に関しては、どちらにその視点を置くかという点について、教科の独自性により異なっている。③「自己の『学び』を自ら振り返る自己評価の力」の育成については、ある程度実践の深まりはあるが、各教科の研究の進捗状況や進め方に課題が残されている。

4. 本年次の研究について

本年次も昨年に引き続き、「教科の基礎・基本を明らかにしていく。」「基礎・基本の定着を図る指導法の研究をする。」を実践し、三年次の研究を進めている。本年度は、各教科の独自性をふまえた上で、②「自己を表現し、コミュニケーションする力」と③「自己の『学び』を自ら振り返る自己評価の力」に視点を移し研究を進めるとともに①「主体的に問題を解決する力」を含めたこれら3つの力の育成について取り組んでいる。そして、各教科によるこれら3つの力が総合的に結びつき育つことにより、「学び」が拓かれることをめざしている。そのため、今一度3つの力の定義づけを明確にした。

①「主体的に問題を解決する力」とは、自ら直面した問題に気づき、その問題に取り組み、よりよい解決方法を見だし解決していく力である。問題を解決するためには、その問題を捉える力や問題に対して多角的に考える力、見通しを立てて考える力、そして、意欲的に問題に取り組もうとする関心・意欲等の力があげられる。

②「自己を表現し、コミュニケーションする力」とは、相談や討論、発表したりする場において、自分の考えを的確に、分かりやすく、筋道立てて相手に伝えることができる力である。主として「話す」「聞く」という手段によるコミュニケーションだけでなく、「読む」「書く」こと、さらに広い意味でのコミュニケーション力として、インターネットを活用することや調査活動をするなどもあげられる。

③「自己の『学び』を自ら振り返る自己評価の力」とは、自らの「学び」を成就感や達成感を抱きながら振り返り、新たな「学び」を強く意識する中で、再び「学び」に挑戦することができる力である。その成就感や達成感を持つには、生徒が自分自身の頑張ったところや自信が持てたところなどに気づくことができ、これからの学習に対して前向きに取り組んで行けるような肯定的な自己評価でなければならない。私たちは、自己評価においては、自分の学習の状況を的確に判断することも大切ではあるが、生徒自身が自己を向上させようとする意欲や態度を育てることがより大切であり、この力を培うことが「生きる力」に繋がっていくものと考えている。

本年度は、このような観点から、各教科の授業実践の中で、自己肯定感を高めるための効果的な自己評価のあり方について研究を進めている。具体的には、生徒が「自分なりにできたところはどこか?」「満足できたことは何か?」「次にどんなことをしたいか?」等を問うような自己評価法を検討してきた。今後も各教科において、生徒自身が自分の可能性を開拓していきけるような評価のあり方を研究していきたい。

- 山極隆、武藤隆編「ゆとりある教育活動、基礎・基本と個性」 1999
 人間教育研究協議会編「授業に生かす自己評価活動」 金子書房 1998
 佐野金吾・小島宏編著「新しい評価の実際1生きる力を育てる評価」 ぎょうせい 2001
 尾木直樹『『学力低下』をどうみるか』 日本放送出版協会 2002
 梶田叡一「絶対評価〈目標準拠評価〉とは何か」 小学館 2004
 田中耕治「学力と評価の“今”を読みとく」 日本標準 2004

～研究の概要について～

研究構想図

